

ライブ・タイトル 03

TAKE
FREE

2026.02 VOL.



河野脳神経外科病院×大分中村病院

連携することで見える 新しい医療のかたち

Feature [対談]



患者家族サポートシリーズ
訪問リハビリとは？
対象者や特徴をわかりやすく紹介

なかのひと、わたしたちの「こころざし」

田北 親寛 大分中村病院副院長 / 脊椎外科部長

金澤 裕美 回復期リハビリテーション病棟 / 理学療法士

▶ あなたの“健幸”をまもり隊

理学療法士が紹介する「お尻上げ運動」

河野脳神経外科病院×大分中村病院 2院のトップが語る

連携した医療で実現する 地域密着のウェルビーイング



大分中村病院 理事長
中村 太郎 (なかむら たろう)

河野脳神経外科病院 院長
河野 義久 (かわの よしひさ)

大分中村病院 オウンドメディア



CONTENTS

大分中村病院は2024年1月、利便性の高い都市型病院としての機能を維持しつつ大分川の真横に位置する風光明媚な立地へ移転しました。この新たなステージにおいて、私たちは「大分中村病院を取り巻くすべての人々と一緒にウェルビーイングを目指すオウンドメディア（＝当院が保有するウェブメディア）」として「リバイタル」を立ち上げました。

「ウェルビーイング」とは、単に病気がない状態や身体の健康にとどまらず、心身の安定や社会的なつながりを持ち、それぞれが自分らしく満たされた状態のこと。

医療において、患者さんとそのご家族は、病氣や治療に関する情報不足や、それによる精神的・心理的な不安やストレスを抱えることがあります。「治療やリハビリはうまくいくだろうか」「退院した後の生活はどうなるのだろうか」「これまでのように趣味や友人との付き合いができるだろうか」など、これから「ウェルビーイングな状態」になれるか、自信が持てなくなる方もいらっしゃると思います。

「リバイタル」は、患者さんのご不安に寄り添い、少しでもそのご不安を和らげ、安心をお届けすることにこだわっています。これは、当院の医療の最前線で働く職員が体現していることも通じます。正確な医療情報であることはもちろんのこと、当院の「こころざしである、病氣だけでなく本気で、人間と向き合う。」にも通じています。職員や当院の空気を、読み応えある特集・連載などのインタビュ記事、ライトに楽しんでいたただけの動画やミニ記事などさまざまなコンテンツでお届けしていきます。

そして、何かのきっかけでここにたどり着いてくださったすべての読者の皆様は、不安やストレスを解消した先にある「ウェルビーイング」に近づききっかけを提供することに對して、私たちは本気で向き合っています。

リバイタル編集委員一同

03 Feature 【対談】

河野脳神経外科病院×大分中村病院 連携することで見える新しい医療の形

08 患者家族サポートシリーズ

訪問リハビリとは？ 対象者や特徴をわかりやすく紹介

10 なかのひと、わたしたちの「こころざし」

—— 大分中村病院副院長 脊椎外科部長 田北 親寛

—— 回復期リハビリテーション病棟 理学療法士 金澤 裕美

14 あなたの“健幸”をまもり隊

▶ お尻上げ運動 ver.1/ver.2

リハビリ機器の世界 ▶ 005. 訓練用長下肢装具 ADアジャストKAFO

▶ 006. レール走行式免荷リフト TAN・POPO[SS-450]

15 リバイタルからのお知らせ



連携した医療で実現する 地域密着のウェルビーイング

—河野脳神経外科病院、大分中村病院の始まりや現在注力されている取り組みをお聞かせください。

河野…当院は開院して30年になります。始めはスタッフ11名の有床診療所でしたが、現在はおよそ100名体制となり、地域の脳神経外科の救急病院として診療を続けています。3年前に新病院へと新築移転し、特に注力したのが血管内治療に特化した体制づくり。24時間365日、即座に血管内治療が行える病院ということで、動線設計にこだわりました。

救急搬送からCT・MRIなどの画像診断、血管撮影室へと、全ての流れが最短で完結できるようにしています。「時間」と「場」の短縮がコンセプトで、血管内治療については、県内でもトップクラ

スになっているのではないかと考えています。

中村…私たちも新しい病院へ移転して一年半ほどになりました。以前の病院は昭和41年に建てられたもので、療養環境も良いとは言えなくなってきた中、「移転」できました。基本となる診療体制は、従来からの延長で「救急医療」と「リハビリテーション」の2本柱です。加えて、地域の医療機関や福祉・介護施設との地域連携を深めていくことを目指しています。

河野…今日、初めて新病院を拝見させていただいたのですが、玄関を入った瞬間に「すごいな」と感じました。先生のこの病院にかけたいやこだわりなど、ぜひ伺いたいです。

中村…いえいえ、そんなに大したものではないですが（笑）、これまで通り、誠実に地域の

皆さんと向き合い、医療機関同士の信頼を大切にしながらやっていきたいという思いだけです。先生はいかがですか？

河野…新築時、ちょうどラグビーワールドカップの年だったんです。日本代表の「One Team」という考え方に共感し、当院も「ワンフロア・ワンチーム」を掲げ、平屋の病院を目指しました。救急・画像診断部・検査部・外来診療部・病棟まで、すべてをワンフロアに集約し、病室からは芝生や樹木のある中庭が見える療養環境を作りました。

—河野脳神経外科病院と大分中村病院の医療連携について教えてください。

河野…現在、回復期の患者さんのリハビリテーションをお願いしている連携を行っています。大分中村病院からは、脳卒中の急性期の患者さんを紹介いただき、当院で治療をさせていただいています。

中村…そうですね。当院は、現

在脳神経外科の手術はほとんど行っていません。患者さんが来られた場合には、河野先生をご紹介して、急性期の治療をお願いしています。その後、当院のリハビリ病棟で受け入れさせていただき、社会復帰を目指すという形です。

河野…連携が本格的に始まったのは、1年ほど前ですね。現在リハビリテーションに関する勉強会も開催しており、先日9回目を迎えました。この勉強会は、2週間に1回のペースで行っていて、当院から紹介した回復期の患者さんについて、画像情報や急性期でのリハビリ状況、転院後の経過などを共有しています。

中村…新病院への移転にあたり、当院では急性期の病床を減らし、回復期リハビリ病棟や地域包括ケア病棟のボリュームを増やしました。これまでの「自院完結型」ではなく、「地域完結型の医療」を目指しました。急性期の治療後

のリハビリや在宅復帰に、他院と連携していこうというのが1つのコンセプトでした。その中で、河野脳神経外科病院の連携がより深まってきたのだと思います。

河野…近年は高齢の方の脳卒中が増えており、多くの患者さんが糖尿病など基礎疾患をお持ちです。中には、治療途中で誤嚥性肺炎を起こされる方もいます。リハビリが必要な方で、当院のような単科病院では全身管理までを担うことが難しい場面もあります。貴院は総合病院で、多様なケアでも快く受け入れてくださり、しっかりとした回復期のリハビリ対応をいただいているので、非常に心強い存在です。

中村…そう言っていただけで、ありがとうございます。

—連携が深まる前後で実感することや、今後の取り組みを教えてください。

河野…現在、ウェブカンファレンス形式で症例報告を行って

います。急性期の段階で画像診断を行い、病巣を把握した上で「どのようなリハビリを行い、どのような経過を辿ったか」といった情報を共有しています。その後の回復期の経過も非常に適切なリハビリプログラムが実施されている面目で、誠実に取り組んでいるのが伝わってきますし、本当に安心してお願いできると実感しています。

今後の連携の形としては、より情報をスムーズに共有できる電子カルテの連携も考えています。「D-LINK（アイデイーリンク）」という仕組みで患者さんのIDをもとに電子カルテの情報が閲覧できるようになっていますが、この仕組みを活用し、患者さんの状態をもとにリアルタイムでディスカッションができる体制を整えていきたいと考えています。



40床の急性期と総合病院が結ぶ 24時間365日の信頼



中村：先生が提案されているような電子カルテを活用した連携が実現すれば、現場での負担軽減や情報の質向上につながりますね。当院の七森院長も「顔の見える連携をしないといけない」とよく言っています。最近は医療連携室を通じてやり取りが主流になっていて、直接医師同士で電話する機会も減ってきました。昔のように「ちょっとこの患者さん、お願いできないか」と直接やりとりする場面が少なくなってきた中で、河野先生とは顔の見える関係で、急性期と回復期として、しっかりと連携していきたいと思っています。

いないのが実情です。血栓回収治療が可能な病院同士で、輪番制がしっかり構築されているのが理想ですが、まだ十分に整っていないのが課題のひとつです。

もうひとつは、回復期の連携です。当院のように40床の小さな病院で、救急医療を担うのは非常に負担が大きいですね。現在は、看護必要度や医療の重症度、DPCレセプト(※)件数など、様々な制度的な要件があります。そんな回復期の病院に転院をお願いしても、すぐ受け入れてもらえないこともあります。そのため急性期側の病床が空かず、運用が厳しくなってしまうんです。

河野：脳卒中の急性期病院としての立場から申し上げますと、現状では急性期対応の体制、特に休日・祝日の各病棟の「当番制」が明確に決まっています。

一方で、脳卒中には季節変動もあります。患者さんが急増したり、ある時期にはがらりと減る。すると今度は病床稼働率が下がってしまうという別の問題が生まれます。理

「救急の空きがない」を、地域で解決するために 急性期と回復期の理想的なリレーを求めて

「お二方の『地域医療×ウェルビーイングへの想い』をお聞かせください。」

河野：当院の基本理念の中に「地域のwell-beingに貢献する」という言葉があります。ウェルビーイングという言葉は定義が難しい面もありますが、私自身開業した目的は、「脳卒中で寝たきりになる方をゼロにしたい」という想いからでした。脳卒中になっても、回復

して社会復帰される方は近年増えていますが、一方で、麻痺が残って生活が不自由になる方も少なくありません。だからこそ、「予防」に取り組むことが地域の健康にとって必要だと考えています。

当院は脳卒中センターであると同時に、認知症疾患医療センターでもあります。寝たきりの原因の多くを占めるのが、脳卒中と認知症。だからこ

想は、患者さんが多いときにはスムーズに転院させていただき、少ないときは当院で診させていただく。そういった柔軟な連携がうまく具合にできるとうれしく感じています。

中村：当院でも今、地域連携部の担当者を中心に、月曜朝から医局にて医師全員と主要スタッフが集まり、病床の受け入れ状況を共有しています。

疾患と状態に対応する病床へできるだけ早く受け入れができるよう調整を行っています。

当院には、急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟の3つがあり、それぞれに看護必要度や平均在院日数といった指標があります。そのため、ベッドコントロールは非常に重要で、専任の担当者が日々看護必要度を測定しながら、マネジメント

そ、この2つの疾患を、「予防の対象」とし、共通するリスク要因や生活習慣に対してしっかりとアプローチしていく。

脳卒中や認知症によって寝たきりになる人を地域からゼロにする—この取り組みが地域におけるウェルビーイングではないかと思っています。

中村：私たちの病院では「救急」と「リハビリテーション」に注力してきました。回復期リハビリ病棟は、患者さんが再び住み慣れた地域で暮らしていけるように支えるための場所です。当院には療養型の病床はありません。「社会復帰・在宅復帰を目指す」ことを前提に、リハビリに取り組みでもらっています。それが患者さん一人一人のウェルビーイングにつながるひとつの形として、今後も取り組んでいけたらと思っています。

最後に今回の対談のご感想やこれからの構想があれば教えてください。

に当たっています。おっしゃる通り患者さんの動きには波があり、多い時期と少ない時期が極端なので、難しいところです。

河野：本当に病床コントロールは大変ですよ。最近はお願ひする患者さんの数は少しずつ増えていると実感します。

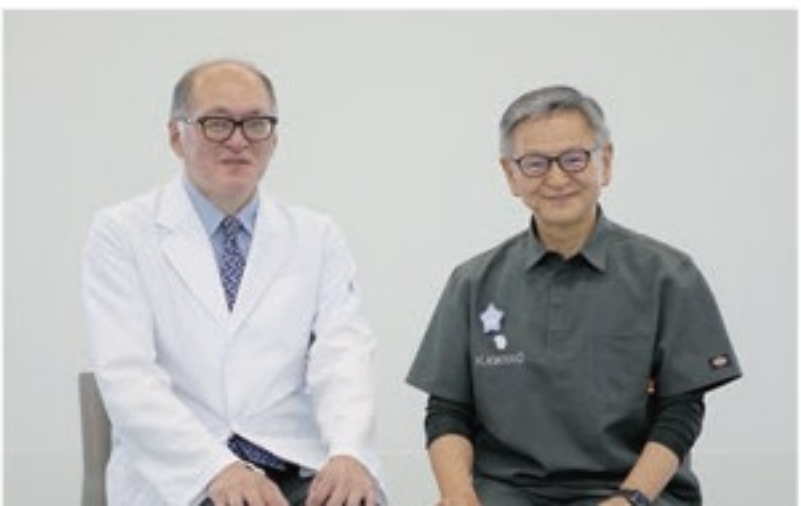
大分中村病院は総合病院として、非常に柔軟に対応してくださるので、本当に助かって

「大分の宝」を、さらなる未来へ 敬意と信頼が紡ぐ、大分医療の新しい形

河野：今日は初めて新しい大分中村病院を見学させていただきました。景色もよく素晴らしい環境で、急性期の治療やリハビリに取り組んでいる患者さんは、きっと幸せだろうなと感じました。

中村：今日はお話を伺いながら、河野先生が自ら病院を立ち上げ、様々な想いを形にされてきたことに、改めて感銘を受けました。私とはまったく違う立場で医療をつくってこられた方だと、尊敬の念を抱いています。

河野：パラリンピック支援や大分国際車いすマラソンなど、大分中村病院全体で積極的に取り組んでおられることは、世界的にも評価されていると思います。これは、まさに「大分の宝」だと思っています。この素晴らしい活動を、これからもどんどん広げていってほしい。



私自身何かお手伝いできればと思っていますので今後もしろしくお願いします。



急性期から生活期までをトータルサポート

ある程度の安静が必要でリスク管理のもとリハビリを行う急性期から、容体が安定した状況で積極的にリハビリを行う回復期、日常生活能力の維持・向上、いきがいに對してリハビリを行う生活期までサポートします。

専門的知識を活用した安心のサポート

当院のセラピストは急性期と生活期の両方の現場経験をもち合わせています。そのため、在宅生活中に新たな病気が発症した場合でも、医学的根拠に基づいた適切なリハビリを受けることが可能です。

利用者さんの興味を引き出すサポート

利用者さんの興味や関心を把握し、必要な動作をリハビリに取り入れることで、楽しみながら続けられる支援を行っています。一人ひとりに寄り添い、豊かな日常生活を送れるよう全力でサポートします。

CHAPTER 02

当院の訪問リハビリの強み

セラピストの質と一貫した対応体制

費用や詳しい利用条件等はホームページをご覧ください



大分中村病院 訪問リハビリテーション



わしは料理が好きだから、料理を使ったリハビリを組んでくれたね。



昔から料理をふるまってくれていたし、また楽しんでくれてそうで嬉しい。

まずはお気軽にご相談ください

当院に入院中の患者さんがご利用の場合	入院中に訪問リハビリをご希望の方は、まず担当のセラピストにお声がけください。その後、担当医・看護師・医療ソーシャルワーカー・セラピストが集まり、退院後の生活を見据えた支援について話し合い（カンファレンス）を行います。カンファレンスの結果、訪問リハビリが必要と判断され、患者さんご本人とケアマネジャーの同意が得られた場合、退院後に訪問リハビリを開始します。訪問リハビリの期間や回数は、お一人おひとりの身体状況に合わせて個別に検討します。
他の病院を退院後にご利用の場合	当院の訪問リハビリをご希望の方は、担当のケアマネジャー、またはお住まいの地域の地域包括支援センターにご相談ください。訪問リハビリの利用が可能な場合は、下記の担当者までご連絡をお願いいたします。医師と相談のうえ、当院で訪問リハビリを実施できるかどうかを検討させていただきます。

大分中村病院 訪問リハビリテーション

住所 大分県大分市舞鶴町1丁目4-1 (大分中村病院内)
担当 竹尾、佐藤
事業所番号 4410123550

電話番号 097-536-5050 (代)

FAX番号 097-537-5180



患者家族サポートシリーズ

誰に相談？

誰でも利用できる？

何するの？

訪問リハビリとは？ 対象者や特徴をわかりやすく紹介

自宅での生活をサポートする「訪問リハビリ」。病院での入院治療を経たあとも、住み慣れた環境の中で継続的にリハビリを受けられるのが大きな特徴です。今回は、80代の中村さんが自宅に戻るまでのストーリーを通じて、訪問リハビリの概要や具体的なサポート内容をわかりやすくご紹介します。

今日の登場人物



中村さん (80代)

現在は一人暮らし。先日自宅で転倒し、骨折のため大分中村病院に入院中。



中村さんの娘

結婚を機に実家を出て父とは離れて暮らし、週に1度、実家に行き父の様子を見る。



リハビリスタッフ

患者さんと距離感わり、基本的な動作能力の回復を目指す。

こんな不安はありませんか？



そんな方へ訪問リハビリをご紹介します！

退院後の生活、一緒に考えませんか？



訪問リハビリとは

自宅に理学療法士・作業療法士などのセラピストが訪問し、日常生活に必要な動作や体力を、自宅の環境に合わせてサポートするサービスです。

利用をおすすめする方

自宅でも安心して過ごせそう！

- 01 退院直後で体力・筋力が落ちている方
- 02 一人暮らしや高齢のご夫婦のみで不安がある方
- 03 自宅の段差や家事動作に不安がある方

CHAPTER 01

訪問リハビリについて

自宅に戻った後の生活に対する不安を解消

一人ひとりの痛みに向き合い、希望をつなぐ 脊椎外科医の確かな信念

大分中村病院の診察室。その一角に、患者の「痛み」と真摯に向き合い続ける脊椎外科医がいる。
田北医師は日々、一人ひとりの患者と向き合い、診察室で膝を突き合わせ、その身体の声に耳を澄ませながら、痛みの正体を探り続けている。



大分中村病院副院長 / 脊椎外科部長
田北親寛 (たきた ちかひろ)

プロフィール

大学病院・他病院での多様な臨床経験と大学院での骨粗鬆症・破骨細胞研究を経て、2010年より大分中村病院に勤務。脊椎疾患を中心に外来・手術等を担当。骨粗鬆症学会認定医として、高齢患者の骨折の連鎖を断ち切るため、「骨粗鬆症リゾナーゼサービス」を立ち上げ、多職種チームでの二次骨折予防に尽力する。

この記事の続きは
ホームページより
ご覧ください。



親戚に医師が多い家系に育った田北医師にとって、医療という仕事は特別濃い存在ではなかった。プラモデルを作るのが大好きだった少年時代、何気なくかけられた叔父の言葉は、今も胸に残る。「お前は医者に向いているよ。」
大人になった今、あの時の「手を使って何かを作る楽しさ」が、整形外科医としての原点だったと笑う。そんな田北医師だが、高校時代は成績も振るわず、進路に悩んだ末、医学部を諦め一度法学部へ進学。しかし、その選択に違和感が残る。(つづく)



今回のなかのひと

田北親寛

患者と共に成長し続ける —ある理学療法士の歩み

毎日リハビリテーション室では、時間になると患者が続々とやってくる。広々とした室内には、多様なリハビリ機器が整然と並び、それぞれのリハビリがゆっくりと始まる。その一角で患者に寄り添う、ある一人の理学療法士、金澤裕美。理学療法士としてのキャリアは18年となるベテランだ。



▶大分県立大分舞鶴高等学校テニス部でのトレーナーの様子

回復期リハビリテーション病棟 / 理学療法士
金澤裕美 (かなざわ ゆみ)

プロフィール

アスリートのトレーニングやコンディショニングに特化したNSCA (National Strength and Conditioning Association) 資格認定者。現在回復期リハビリテーション病棟にて、主に整形外科疾患の患者に対するリハビリテーションを担当。日々の業務に従事する傍ら、大分舞鶴高校テニス部のトレーナーを務め、生徒のトレーニング指導やコンディショニング調整にも取り組む。

この記事の続きは
ホームページより
ご覧ください。



現在回復期リハビリテーション病棟で患者とリハビリに励みながら、高校テニス部のトレーナーとしても活動を続けている金澤。「色々な疾患を経験できる環境に身を置きたいと思った」と語るように、様々な症例に日々向き合いながら、知識や技術の引き出しを増やしてきた。

そんな金澤の原点は、自らが経験した「怪我」にあった。「その経験があったからこそ『人の体に関わる仕事』に興味を持ちました。(つづく)」

今回のなかのひと

金澤裕美



地域を、ともに支える医療へ
一両院が描くこれからの連携



大分中村病院

院長 七森 和久

大東よつば病院

院長 立川 洋一 / 医師 高倉 健

リバイタル
ご感想アンケート

今後、より皆さまに寄り添った情報発信を行っていくために、ぜひ皆さまのご意見・ご感想をお聞かせいただけますと幸いです。

お手数をおかけいたしますが、右記のQRコードよりアンケートへのご協力をお願い申し上げます。

ご感想アンケートはこちら▶



リバイタル バックナンバー公開中



バックナンバーは
ホームページにて
公開中です!



編集後記

30数年前、ハーバード大学に人工膝関節の勉強に行った際、ボストン美術館でゴッギャンを見た。大学人として行き詰まっていた僕は、とある絵の前で立ち尽くした。「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」その絵の題である。後の人生、ことある度にこの言葉を噛み締めてきた。今、我々一両院である。日本においてリハビリテーションをいち早く取り入れた人、当時民間では珍しかった救急病院を立ち上げた人、「中村裕一先生が僕らの根っこだ、そして「どこへ?」は僕らに残された課題だ。今の医療情勢では先行きは見えにくい。しかし、患者に、働く仲間、真摯に向き合うという意味で、「こころざし」を考えた。「病室だけでなく、本気で、人間と向き合う。」イイネと悦に入っていると、昔、湯布院の保養所の床の間に掛けてあった裕先生の言葉を思い出した。「保護より、機会を」なんと人間に向き合った言葉であることか。お釈迦様ならぬ裕先生の掌の上。

体操動画シリーズ

今回の体操は /
「理学療法士」が紹介

「お尻上げ運動 ver.1/2」

体調に合わせて無理のない範囲で行いましょう



① 仰向けに寝て肩幅くらいに足を開く



② 両膝を立てた状態にして、足は両膝の真下に置く
ver.2 膝の間にボールやタオルを挟む
③ 両腕を体の横に置く



④ 頭、肩甲骨と足でお尻を浮かせ、体を支える
⑤ 肩から膝までが一直線になるよう姿勢をキープ



⑥ お尻を元の位置に戻す
⑦ 呼吸は止めずに一定のペースで10回〜20回繰り返す

主な効果

• お尻上げ運動 ver.1
大臀筋、ハムストリングス、脊柱起立筋が鍛えられ、お尻・もも裏の基本的な筋力アップ

• お尻上げ運動 ver.2
ボールを挟む動作が加わると内転筋、体幹インナーマッスルが鍛えられ、体幹の安定性強化、膝の負担軽減

動画視聴はこちら



他にも様々な
体操動画を
公開中!

体操動画シリーズは
こんな方におすすめ!!
・おうちでもリハビリを続けたい
・痛みやけがをしない体づくりをしたい
・退院後も体力を維持したい

大分中村病院では、公式YouTubeチャンネルでお家でできる体操や採用情報など様々な発信をしています。ぜひご覧ください。



YouTube / @大分中村病院チャンネル
チャンネル登録をお願いします。



File.006

レール走行式免荷リフト
TAN・POPO[SS-450]



File.005

訓練用長下肢装具
ADアジャストKAFO

当院で使用しているリハビリ機器をセラピストによる解説動画でわかりやすくご紹介。



現役セラピストが解説
リハビリ機器の世界

お尻と内ももの
筋力アップ&姿勢改善

あなたの
「健幸」を
まもり隊





◀東京2020パラリンピック
競技大会 聖火リレートーチ
理事長・中村太郎がランナー
として参加。パラスポーツへの
長年の関わりを象徴する

▼看板式車椅子
当院に保管されていた日本で
初めて製作された「看板式車椅子」
が現在は太郎の家に寄贈



何かのきっかけで
ここにたどり着いてくださった
すべての読者の皆様に、
不安やストレスを解消した先にある
「ウェルビーイング」に近づく
きっかけを提供することに
私たちは本気で向き合っています。



社会医療法人恵愛会

大分中村病院

所在地 〒870-0044 大分県大分市舞鶴町1丁目4-1

TEL 097-536-5050

病院種別 一般病院(二次救急指定病院)

病床数 260床(一般病棟、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟)

リハビリ施設基準
心大血管疾患リハビリテーション科 | 呼吸器リハビリテーション科 |
脳血管疾患等リハビリテーション科 | 運動器リハビリテーション科 |
廃用症候群リハビリテーション科 | がん患者リハビリテーション科

診療科目 整形外科・脊椎外科・手外科・外科・腫瘍外科・脳神経外科・内科・循環器内科・
消化器内科・腎臓内科・糖尿病内科・呼吸器内科・緩和ケア内科・形成外科・
泌尿器科・リハビリテーション科・肛門外科・リウマチ科・心臓血管外科・
婦人科・骨盤底リハビリテーション科・放射線科・皮膚科・麻酔科・救急科



病院
ホームページ



リバイタル
ホームページ